

エッセイ 中東奮闘記—湾岸50年、オイルマンの軌跡

第一回 初めての中東

遠藤晴男

(日本オマーンクラブ名誉会長)

遠藤晴男さんはアラビア湾岸を中心にオイルマンとして長年活躍されました。その間に大きく展開していく世界の石油事情を背景に、様々な部署で働いてこられました。その奮闘ぶりは、まさに「50年にもわたる中東奮闘記」になっています。仕事だけでなく、赴任された地域との友好団体の設立や支援に携わり、その地の大学生と日本人学生の交流も実施されたりしてきました。その真骨頂が2010年の日本オマーンクラブの設立です。遠藤さんは2013年にこのクラブの会長になりました。また長年のアラビア湾岸地域、特にオマーンとの友好推進に尽力されたことに対して2007年にオマーンから、「勲一等カブース国王陛下下文化・科学・芸術勲章」を日本人として初めて受賞されました。2017年には外務大臣表彰を、翌年にはオマーン大使表彰を受けられました。

今後数回にわたって、遠藤さんの華々しく凛々しく人間味にあふれた50年間の思い出を存分に語っていただきます。なお、今回のページの末尾に遠藤さんの経歴と出版物のご紹介がありますので、ご覧になってください。(塩尻和子)

1-1 初めての外国、イラン

1973年6月15日の深夜、私はエアフランス415便のエコノミー席に身を固くして座っていた。

非常灯の明かりだけの薄暗い機内、乗客のほとんどが眠りにつき、漆黒の闇の中を飛ぶ飛行機の安定したエンジン音が、機内の静けさを引き立たせていた。

3人掛けのエコノミー席の真ん中に座っていた私の左右には、ギリシャ人姉妹がかすかな寝息を立てていた。日本での貿易業を手仕舞いして、一家でギリシャに引き揚げる途中だという。前の座席には、両親と小学生の弟の3人。

当時日本で唯一の国際空港であった羽田を発ったのは、夕方の5時。低い鉄柵で仕切られたゲートで送ってくれた妻節子の心配そうな顔が目には浮かんだ。結婚して13年目で初めて飛行場という場所での妻の顔は、新鮮であった。

私はその年40歳になっていたが、それまでに飛行機に乗ったことがなく、ましてや外国などには行ったこともなかった。初めての飛行機、初めての外国への旅、しかも、一人旅であった。

1957年に東京外国語大学を卒業して丸善石油に入社した私は、東京支社での8年間で英語を使ったのは米軍向けの燃料納入を担当した最初の2年間だけ、後の6年間は外貨割り当てを受けるための通産省との折衝や社内需給計画の策定・管理などに従事した。その後8年間の大阪本社でも、コンピューターを使ってのLP（リニア・プログラミング）による最適生産・販売計画や全社損益計画の策定・管理を担当し、外国や英語とはまった

く縁がなかった。

それがである。1973年4月に東京本社企画2部に配属されて、部長から「出来るだけ早くテヘランに行くように。出張期間は、とりあえず3週間」と言われたのは、出発5日前の6月10日。晴天霹靂の社命であった。

パスポートやビザの取得、書類の整理、旅行カバンの購入から身支度やお土産の準備などを妻と走り回って済ませ、くたくたの状態で滑り込んだのがこのエアフランス415便であった。

私がこのようないきなりの外国出張を命じられたのは、当時大きく転換し始めていた世界石油情勢のせいであった。それまで世界の石油を支配してきたセブン・シスターズ（7人の魔女）」と呼ばれていた石油メジャーに替わってOPEC（石油輸出国機構）が台頭し、世界の石油市場が買手市場から売り手市場へと転換しつつあった。

「セブン・シスターズ」とは、エクソン、モービル、テキサコ、ソーカル、ガルフの米系5社とイギリス・オランダ系のロイヤル・ダッチ・シェルとイギリスのBPの7社であった。

石油メジャーズは、1928年7月に旧トルコ領（メソポタミアとアラビア半島）内での原油の探鉱・開発・生産を共同事業とし、単独では行わないとする赤線協定（Red Line Agreement）を締結した。各社はこの協定の下で湾岸で石油利権を取得し、中東の石油の支配体制を作り上げた。

また、同年9月にはエクソン、ロイヤル・ダッチ・シェルとBPのビッグスリーが、過当競争を排除するために、アメリカとソ連を除く世界中の原油の生産、販売、輸送に関してアクナキャリ協定（Achnacarry Agreement）を締結した。1928年の各社の売り上げ比率の維持を定めたので、この協定は現状維持協定とも呼ばれた。

これらによって1920年代末から1930年代にかけて世界全般に亘る石油産業支配を確立したセブン・シスターズは、第2次世界大戦後の1949年には、世界全体の原油埋蔵量の66%、生産量の54.6%、石油精製量の56.7%を抑えていた。アメリカとソ連を除く地域だけで見ると、その占有度はさらに高まり原油埋蔵量で92%、生産量で88%、石油精製量では77%であった。

石油メジャーが産油国と締結した初期の石油利権契約では、産油国には産油量トン当たり一定金額のロイヤリティーを支払うとされていたので、産油国は石油の価格水準には関心がなかった。

1948年にベネズエラが世界で初めて産油国収入に所得税制度を導入し、石油会社と産油国の利益折半方式とすることに成功した。これに影響を受けたサウジアラビアも1950年に石油会社との交渉によって、原油公示価格制度を前提とした利益折半方式を導入した。この方式は、その後クウェートやカタールその他の産油国にも適用された。これによって、産油国は原油価格に関心を持たざるをえなくなった。

1950年代に入って、石油メジャーや新規参入した独立系石油会社によってペルシャ湾岸諸国や北アフリカで巨大油田の発見が相次ぎ、コストの安い原油の供給量が増大した。さらに、1959年の国内石油生産業者保護のためのアメリカの原油の輸入割当制やソ連原油の市場への参入によって原油が過剰となり、石油価格は下落した。公示価格と実勢価格の間にギャップが生じ、産油国に支払うロイヤリティー（当時は定額から公示価格の1

2・5%に変更されていた)と所得税を公示価格で計算していた石油メジャーの収益が圧迫された。そこで、石油メジャーは1959年2月に1バレル当たり18セント、60年8月にも14セント公示価格を引き下げ、産油国の石油収入が減少した。

1959年の値下げに対して、ベネズエラとイランがオブザーバーとして加わった同年4月のカイロでのアラブ連盟主催のアラブ石油会議で「価格の変更については、石油会社は産油国の意向を聴取すべきである」と決議をしていた産油国は、1960年の値下げに對抗してアクションを起こした。

1960年9月にベネズエラのアルフォンソ石油相とサウジアラビアのタリキ初代石油鉱物資源相が中心となって、イラン、イラク、クウェート、サウジアラビア、ベネズエラの5ヶ国がイラクのバグダードに参集してOPECを設立したのが、それである。しかし、その後のOPECは泣かず飛ばずの状態が続き、セブン・シスターズの石油支配は続いた。

1969年9月にリビアで当時27歳のカダフィ大佐がクーデターによってトルコで静養中であった国王イドリース1世を廃位にして政権を握ってから、世界の石油情勢はドラマチックな展開を見せた。

カダフィは、1967年6月の第3次中東戦争によるスエズ運河の閉鎖と前年のペルシヤ湾と地中海とを結ぶタングラインの破壊によるタンカーレートの高騰でリビア原油が割安になったことと軽質で硫黄分が少ないリビア原油への需要が多いことを武器に、原油価格と所得税率の引き上げを狙って、国際石油カルテルに対して石油戦争を仕掛けた。

作戦は巧妙であった。リビアにしか地盤がなく、他の石油会社、とくにメジャーに評判の悪かったオキシデンタル石油を第1の標的としたのである。価格と税率のアップを飲まなければ、武力に訴えても現行の石油利権協定を破棄すると脅した。

オキシデンタルは供給源の振り替え先を模索したが見つからず万策尽きて9ヶ月間の長期交渉後の1970年9月にリビアの要求を受け入れ、ついには、ソーカル、テキサコを先頭にメジャーも雪崩を打ってこのリビアの要求に屈したのであった。

リビアは公示価格の30セント/バレルの値上げを勝ち取り、石油会社が支払う所得税も50%から55%となった。これにより、それまでメジャーが一方的に行使していた価格決定権は、産油国と石油会社との交渉事になった。

これを見て、それまで雲の上の存在であったメジャーが恐れるに足らないことを知ったOPECの石油の値上げ攻勢が一斉に始まった。

同年11月には湾岸産油国も重質油の値上げに成功、同年12月にベネズエラのカラカスで開かれたOPEC総会では、原油と所得税率の値上げとインフレによる産油国の購買力の補償を求める方針が決議された。

引き続き、1971年2月に湾岸地域6産油国と湾岸で操業する国際石油会社との間で開催されたテヘラン会議は、33セントの公示価格値上げとインフレ調整のため1975年まで毎年2・5%の公示価格の引き上げ並びに所得税率の55%への引き上げを主張した産油国側の一方的な勝利に終わった。同4月には、リビアと国際石油会社との間で、公示価格を低硫黄プレミアム等を加えて合計92セント引き上げるトリポリ協定が締結された。

この結果、指標原油のアラビアン・ライトの公示価格は2月には1960年8月以降の1・80ドル/バレルから2・18ドル/バレルへ、6月には2・285ドル/バレルに

値上げされた。

アメリカのドル切り下げに対応して原油価格を引き上げるための1972年1月のジュネーブ協定（翌年6月の新ジュネーブ協定で補足）によって、1973年1月にアラビアン・ライトは3.011ドル/バレルに引き上げられた。

また、1972年12月の湾岸4ヶ国とのリヤド協定によって、国際石油会社への産油国の事業参加への途も開かれた。当初（1973年1月）の参加比率は25%、以下1年ごとに5%増、1982年に51%にすると規定された。実際には、1976年から1977年に、クウェート、カタール、アブダビ、サウジアラビアなどで100%の国有化が実現した。

1925年にイランでパフラヴィー朝を創設したコサック旅団の将校上がりのレザー・シャーの息子のモハンマド・レザー・シャーが1941年に第2代皇帝に即位した。彼は1963年以来の日本の飛躍的な経済発展をみて白色革命の旗を掲げてイランの近代化・工業化を進め、国民の圧倒的な支持を得ていた。

1971年10月にイランの古都ペルスポリスで開催したペルシャ帝国の2500年祭では、彼は自らをシャーランシャー（王の中の王）と称して得意満面であった。それに加えてテヘラン会議でメジャーを屈服させることが出来て、イランを今世紀中に世界5大工業国家の1つにすると豪語して乗りに乗っていた。

こんな中で、NIOC（イラン国営石油会社）が1973年に輸出製油所をイランに建設することが原油供給の前提であるとの難題を持ち出し、日本などの原油輸入国に対してこのプロジェクトへの参加を呼びかけてきた。その態度は懇懇ではあったが、脅迫に近いものであった。

この呼び掛けに日本から名乗りを上げたのが、大手商社を中核とする4グループと石油会社を中核とする2グループ、それに事業多角化の一環として石油開発分野への進出を目指していた帝人を加えた7グループであった。石油会社は、丸善石油と出光興産。

丸善石油グループには関連石油会社2社と日商岩井とニチメンの2商社が参加したが、このグループを代表してNIOCとの折衝に当たるのが私に与えられたテヘランでの任務であった。

戦後消費地精製主義を金科玉条としてきた日本にとって、海外に製油所を建設する、しかも50万バレル/日という巨大製油所を建設するというような難問に、どのグループもおいそれと回答を出せるような状況にはなかった。各グループとも五里霧中の状態で、ただただ他社に遅れをとってはならないという姿勢でNIOCに対応した。

外国旅行の右も左も分からず、また機内の英語のアナウンスの半分も聞き取れない私は、かくしてテヘラン行きの飛行機に乗せられたのであった。

しかし、中東への旅立ちには美しいギリシャ姉妹にはさまれたの忘れえぬものであった。ニューデリーでの給油を終えた飛行機は、朝日を浴びてオレンジ色に輝くヒマラヤの峰々の南を飛び、しばらくの安定飛行の後にテヘランの空港に近づいた。

「シートベルトをお締め下さい。禁煙願います」の機内アナウンスの後、「ドスン」という音と共に機体が地面に接地したと思ったら、「ザー」という轟音、機体がガタガタと大きく振動して、機内がユサユサと揺れる。翼のフラップを立てての急制動、途中寄港したバンコク、ニューデリーに続いて、私が生まれて初めて体験した飛行機の着陸の

あり様であった。

テヘランに到着した私は、姉妹一家と「どうぞよい旅を」、「おじさまも」と言葉を交わして機を降りた。

「テヘランの税関はチェックが厳しい。トランクの荷物の上に、日本の漬物を並べておくとよいですよ。匂いに弱い彼らは、荷物の方はろくろく見ませんよ」と商社の人たちから事前に教えられていたが、初体験の外国での税関検査も無事通過。

1973年6月16日朝、かくして私は快晴のメヘラーバード国際空港で中東への第一歩を記した。その先に波乱万丈の人生が待ち受けていようとは、その時の私にはまったく想像できなかった。

1-2. 毎日が同じ景色

朝6時、テヘランの中心部を貫くタクテ・ジャムシッド通りに面したインペリアル・ホテルの11階の部屋。ベッドから起き出してカーテンを開けると、正面に海拔3000メートルを超すエルブルズ山並みとやや離れて右側に朝日に映える中東の最高峰、標高5671メートルのダマバンド山。

真下はホテルの中庭、緑の芝生と青い水をたたえたプールが見える。昼下がりには、欧米のご婦人たちの美しい水着姿で華やかな風景を演出してくれるのだが、朝は閑散として、寒々とした表情だった。

再び眼を上げると、土色の建物と緑がまばらなテヘランの街並みが山手の方向に視界いっぱいに広がっている。ホテルに隣接する民家のベランダでは、イラン人の男たちが寝ている。イランでは夏の寝苦しい夜には、屋外にベッドを持ち出して寝ると聞いた。

そういえば、この風景は昨日も一昨日も同じであった。その前も。いつ見ても、同じ朝の風景だった。6月のテヘランは雲も出ないし雨も降らない、毎日が快晴なのだから同じ景色が続くのだとしばらくして気付いたが、風も吹き雨も降る日本で育った私には信じ難いことであった。

私がテヘランに来て最初に投宿したのは、デラックスなインターコンチネンタル・ホテル。外国のホテルに泊まるのも、私には初体験であった。ビデも初めて見たし、また洗面所のタオルの種類やその枚数の多さに驚いたりもした。

テヘランに入って1週間ほどして、NIOCとの会議のために、本社から増野常務をトップとする代表団がテヘランにやってきた。打ち合わせや関係商社等への表敬訪問、NIOCとの会議を終えて代表団が日本に帰る時に常務から、「君には3週間とあったが、プロジェクトの見通しが立たないので、いましばらくテヘランにいるように」と言われた。そこで、長期滞在に適した中規模のインペリアル・ホテルに移ったのだった。NIOCにも徒歩で行けるので便利がよかった。

朝9時過ぎに部屋を出ようとする時、お向かいの部屋のドアが開いている。何気なく眼をやると、化粧台の前で金髪の女性が着替えをしているのが見えて、思わず眼をそむけることもあった。欧米人の場合には、奥さんが夫のテヘラン長期出張や駐在のための家探しの段階から付き添ってきていた。奥さんたちは夫を会社に送り出してから買い物に出かけたりプールで泳いだりしながら、その帰りを待つのだと聞いた。

夜は夫婦で連れ立って街に出かけ、食事や各種の娯楽を楽しむ。それまで外国に出たことのない私には、別世界の風景を見ているようであった。

テヘランは1796年からイランを支配したカジャール朝がその年に都と定めてから発展した街である。1925年に興ったパフラヴィー朝時代に急速に発展し、1973年当時は人口も400万人を超え、カイロと並ぶ中東を代表する大都会であった。

テヘランは標高1200メートルにある街。北には高級住宅地のシムラン地区、中心部には近代的なビルが集中し、南部には商業の中心地であるバザール地区が広がっていた。そして、北から南に続く標高差400メートルの街路の側溝をエルブルズ山系からのきれいな水が音を立てて流れ落ち、舗道に覆いかぶさるプラタナスの並木の濃い緑の葉が風に揺れながら、夏の強い日差しを遮っていた。

通りが交差するメイダン（円形交差点）には、噴水、手入れされた樹木や美しい花壇がしつらえてあった。20世紀中にイランを世界5大先進国の仲間入りをさせるべく近代化を急ぐパフラヴィー国王絶頂期の華やかなテヘランの風景であった。

テヘラン滞在中に訪れたNIOC副総裁のサマニ博士の家は高級住宅地のシムラン地区にあった。広い敷地、高い塀の門から玄関までタイルが敷き詰められた通路、ペルシャ絨毯が敷かれている応接間、そこから見える庭には青い水を満々とたたえた広いプール。先には、エルブルズの山並みが仰ぎ見られた。豪邸と満ち足りた暮らしぶりは、私の想像を超えるものだった。

当時イランで石油の試掘をしていた日本の第一石油の大川代表や日商岩井の竹本代表の屋敷は市の中心寄りにあったが、驚くほどの豪邸であった。大川代表の邸宅の広い応接間にはペルシャ絨毯が敷き詰められ、高級家具が置かれ、庭にはブーゲンビリアやバラの花々が大きなプールを見え隠れさせるほどに咲き乱れ、來世の極楽を感じさせるほどであった。

竹本代表の家は白い瀟洒な3階建ての洋館で、玄関を入れて広い応接間の階段を上ったところの白い手すりのついた屋内テラスやガーデンパーティーに招かれたプールのある広い芝生の庭は、アメリカ映画のセットを見る思いであった。初めて外国で滞在する私は、驚くばかりであった。

南部に位置する雑多な店が立ち並ぶバザール。イギリス人作曲家アルバート・ケテルビーの珠玉の名曲「ペルシャの市場にて」がぴったりの風情。老若男女が身動きできないほどの人ごみの中を急ぎ足で行き交う喧騒の場であった。

狭い通りにいろいろな店が立ち並んでいる。その一角には、土のついたままの瑠璃色のペルシャの陶器や土器類などを商う骨董品屋も軒を並べている。「これはいつごろのもの？」、「紀元前2000年だよ」、「エッ。これは？」、「紀元前2500年から3000年ぐらいかな」と無造作に答える店の親父。

さすがに古い歴史を持つ国だなと感心しながらも、「おいおい、そう無造作に紀元前2000年とか紀元前3000年とか言うなよ」と品物をじっくり見ても、鑑識眼のない私には見分けようもない。しかし、ここは中東、しかもイラン、それらしく作った偽物が多いと後で聞かされた。

私は本社代表団の2人とある絨毯屋に入った。絨毯は中東が世界に誇る文化遺産、イランはトルコと並ぶ絨毯の本場。「彼らは値段を吹っかけてくる。絶対に言い値で買わないように、必ず値切ること。まけないようなら、『要らない』と言って店を出たらよい。追い

かけてきて、まけてくれる」と商社の支店長に教えられていた。

さんざん値段交渉した後で「じゃあ買わない」と言って店を出たが、店の親父が一向に追いかけてこない。「追いかけてこないよ。せっかく交渉したことだし、戻って粘ってみようよ」と絨毯屋におめおめと戻った。

「3枚買うのだから安くしてよ」、「旦那方よ、1枚と言わず、2枚ずつ買っておくのがお得だよ。絨毯と石油の値段は、これからどんどん上がる。絨毯は手作り、どれも世界に1つしかないもの。一財産になるよ」と親父は強気。「石油と絨毯は高くなる一方か。N I O Cも強気な筈だ」と親父の話に妙に感心した。

本社代表団がまだテヘラン滞在中に一行とカスピ海も訪れた。テヘランから車でエルブルズ山系を登り、途中のダムで一休み。そこからさらに登ると、まもなく道は下りに入った。石がゴロゴロと転がる路を下るにつれて、周りに緑がふえてきた。

やがて、生い茂る木々が道路に覆いかぶさり始めた。緑の葉の間から音を立てて流れ落ちる清流も見えた。さらに山道を下ると、木々の間から一気に視界が広がった。眼前には灰色に光るカスピ海。右下には日本そっくりの水田風景が広がっていた。思いもかけない風景であった。

さらに山を下ってカスピ海沿いに左折すると、イランで有名な保養地ラムサールに着いた。高級感の漂うホテルに一泊し、翌日はカスピ海沿いに真東にドライブ。湖畔の別荘の庭に入り込み、本場のキャビアを1センチ近くの厚さに塗りたくったパンを片手に飲むウオッカの味は格別であった。人生で初めてのキャビア。

カスピ海に足を入れる。世界最大の湖といわれているが、これは湖ではない。名前のおり、海だ。対岸がまったく見えない。見えるのは水平線だけ。打ち寄せる波も湖のものではない。海の波だ。違うのは水の色。塩分が低いので青くなかった。

コーカサスから吹き付ける湿った空気がこのエルブルズ山脈にぶつかり、カスピ海側に雨を降らせる。そこは緑一色。水分を落とした乾燥した空気が空っ風となって、一気にイラン高原からザグロス山脈に吹き付け、さらにアラビア湾まで下る。そこは、乾燥の砂漠。

関東平野と日本海側でも、空っ風が吹く所からトンネルを抜ければそこは雪国。トンネル1つで景色ががらっと変わる。仕組みは同じだろうが、イランの方がスケールがはるかに大きいと思った。エルブルズ山脈は、最高峰が5千メートル超、長さが約1千キロメートルに及ぶ。

1-3 中東の戦友第1号

N I O C提案の巨大輸出製油所は規模プロジェクトは、私がテヘランに滞在した3ヶ月の間に進展はなかった。この間、私は2つのプロジェクトに関わった。

その1つが、砂漠の緑化に関する調査であった。

当時N I O Cは、モービルがリビアで大掛かりに実施していたマルチ方式による緑化実験を南部のアフワズ市郊外で進めていた。大型機械を使って砂漠の表面にアスファルトを撒いて砂の飛散と表面からの水分の蒸発を防ぎ、蓄えられた水で植物の生育を図るというものであった。

マルチに関する写真や資料を担当のナジャファイ博士から仕入れた私は、同博士らとテヘ

ランから550キロ南のアフワズ郊外の実験場を見学することにした。テヘランに着いて、1ヶ月経つや経たない時であった。

テヘランのメヘラーバード国際空港を飛び立って30分余り。これは何だ！一木一草もない褐色の山肌、のこぎり歯の形に切り立った峰々の連なりが眼下に広がってきた。延々とつながっている。この世の終わりを思わせる恐ろしい風景だ。こんな風景は日本にはない。

これが、西北から東南に長さ1600キロ、幅240キロに連なるザグロス山脈であった。私は、孤独なイラン人の性格を作り上げたともいうこの壮絶な風景を食い入るように見続けた。

飛行機はやがてアフワズ空港に到着。そこで乗り込んだNIOCの車は、しばらくして砂漠地帯に入った。人生で初めて見る砂漠であった。車の左右に、夏の日差しを受けた黄色い砂丘が広がった。

実験場の事務所から砂漠に入ると、あたりを睥睨するような巨大機械が目に入った。多くの噴射口のついた10メートルぐらいの翼を両側に取り付けたトラクターで、アスファルト散布の作業中であった。撒かれた黒々としたアスファルトの下に植物の種を植えるとそこにある水で木々が育つのだと聞いた。

博士の案内で、木を植えてから1年目、2年目、3年目の場所を見て廻った。「砂漠では、タマリスクとかユーカリが良く育つ。3年目のここでは、こんなに大きくなっている」とナジャフイ博士。そこでは木々が数メートルの高さに伸び、豊かな緑色の葉を付けた枝がゆったりと風に揺れていた。イランの夏の青い空によく映えていた。

「ミスター、エンドウ、植えた木が育つと虫が集まり、その虫を追って鳥がやってくる。ホラ、あそこに鳥が来ている。鳥の糞で草も生えてくる。そこで、狐までやって来る。これは狐の足跡。それも1匹や2匹ではないよ」と博士の説明は続いた。「へえ、砂漠に狐なんかいるのか。砂漠って、生き物なんかいないと思っていたのに」と驚いた。

この機会を利用してかの有名なアバダン訪問を計画していた私は、アフワズに泊まるという博士と別れて、午後4時過ぎに博士が手配してくれた車で120キロほど南のアバダンに向かった。ドライバーはアフワズ空港に迎えに来たのとは違う初対面のドライバー、青白い丸顔にひげを蓄えた20代のイラン青年。

イラン南部は、1908年に中東で最初に油田が発見された場所である。目的地は、当時BP帝国の象徴であった、1912年に建設された中東最初の石油積出港と世界最大級の製油所のあるアバダン。石油の聖地への訪問に、オイルマンの端くれの私は血湧き肉躍る思いであった。

アフワズを出た車は、見晴らしのよいイラン高原の土獺の道を砂ぼこりを立てながら走った。そこには、そこそこ草が生えていた。石油が中東で初めて発見されたチア・スルクは、遠く北に見える山の麓辺りであろうか。

石油産業が始まったのは比較的新しく、1859年にアメリカのペンシルバニア州タイタス・ビルでエドワード・ドレークが深さ69フィートの井戸からの採掘に成功して以来のことである。

石油の精製と販売に従事していたロックフェラーが創業したスタンダード石油会社が石油の輸送手段であった鉄道を独占し、産油業者の石油を買い叩き、大会社に成長した。そ

の後ペンシルバニア州の石油の枯渇とともに、自らも石油の採掘にも進出した。

一方、アゼルバイジャン共和国のバクーでは以前から石油の採掘が小規模に行われていたが、アメリカでの近代的な石油産業の発展を知ったルドビック・ノーベルが1875年にここでの石油業に進出した。ノーベル賞を創設したアルフレッド・ノーベルの兄である。

また、アメリカ・テキサス州ヒューストンから130キロほど離れたスピンドルトップと呼ばれる小高い丘でも1901年初めに大油田が発見され、そこからテキサスやガルフ石油などの大手石油会社が出現した。石油の採掘はメキシコにも及んだ。1904年にメキシコの東海岸タンピコ近くで採掘が始まった。

中東で初めて石油が産出したのはここイラン南部、1908年5月26日のことである。この快挙を成し遂げた立役者は、ウィリアム・ノックス・ダーシー卿とジョージ・バーナード・レイノルドの2人。オーストラリアの金鉱で財を成して当時すでにロンドンに引退していたダーシー卿は、1901年にイランに大油田があるとの情報を得るや直ちにイランに人を派遣し、石油利権の獲得に成功する。そして、彼は風変わりな独学の地質技術者のレイノルドを現場の長に任命した。

当時すでに50歳だったレイノルドは灼熱のチア・スルクで掘削を開始したが、3年間の悪戦苦闘の甲斐もなく、石油を見つけることができなかった。一方、20万ポンドを費やしてダーシー卿の資金も底をついてしまう。そこで、ダーシー卿はバーマ石油の資本参加を得ることで資金を捻出し、さらに2年間懸命に掘り続け、この井戸が資金的に最後の1本という時に遂に不毛の地から石油が噴出したのであった。50フィートもの高さに勢いよく噴出する石油にレイノルドは狂喜乱舞したという。

私がいま通っているのは、まさにその南部イラン。アフズを出てからすでに4、50分は経っている。先ほどから少し風が出始めた。そのうちに幾重もの筋を引きながら砂が道路に流れ始めた。砂嵐のようであった。初体験。前を走る小型トラックの荷台に乗って我々の方を見ていたイラン人労働者たちが、布で顔を覆い始めた。

「もっと風が強くなると、どうなるのだろう。今回の出張は本社以外には誰にも言わずに来てしまったから、事故があっても行方不明になってしまうかも」と要らぬ事態も夢想した。砂嵐はますます強まってきた。先を走る小型トラックの姿も砂嵐の中で見え隠れするようになっている。荷台に乗っているイラン人たちは幌を下ろしていた。車の外では砂だけが舞っていた。

「大丈夫か」、「気をつけて。ゆっくり！」とドライバーに言葉をかけるが、彼は「分かっています」というのが精一杯で、全神経を前方だけに集中していた。日も西に傾き、薄暗くなりかけている。アバダンほどのぐらい先なのだろうか。砂がビュービューと叩きつけ、車体が激しく揺れる。

やがて、街灯のある道路に入った。アバダンのようであった。街は夕闇に包まれ始め、家々には電灯の明かりがポツンポツンとつき始めていた。走るにつれて眼前に迫る街灯が大きく見えて、まぶしい。これで助かった。

「ここまで来れば、大丈夫」と安堵、車は海に面したアバダン・ホテルに着いた。車を降りた時に、ドライバーが、「無事着いた。よかった！」と抱きついてきた。初めて経験した中東人との抱擁。彼の体温が私に伝わり、彼のひげが顔に刺さった。

私は「ありがとう。くれぐれも気をつけて帰れよ」と言いながら力一杯の握手を何回も

何回も繰り返した。夕なずむアバダンのホテルで中東の戦友第1号となったイラン人青年との別れであった。

1-4 メジャーの影

「えっ！テヘランには来ないのですか。NIGC（イラン国営ガス会社）では訪問を心待ちにしています。どういうことですか」と、私はニチメンのテヘラン事務所で東京本社からの電話に応答していた。

「増野常務と副部長、それにニチメンの専務らもテヘランに向かうべく羽田空港に出かける直前にNIGCから『このプロジェクトは中止にしたい』というテレックスが入った。とりあえずテヘラン行きは取り止めることにした」と本社からの連絡。

「現地調査した上でフィージビリティスタディ（FS）も終わった。あとはNIGCとの最終打ち合わせ。NIGCも合意しているのにどうしてですか。分かりました。NIGCで事情を聞いてきます」と言って私は電話を切った。

私がテヘランでの滞在中に関わったもう1つのプロジェクトが、ペルシャ湾南部のラバン島での石油液化ガス回収装置建設プロジェクトであった。

製油所建設プロジェクトに進展がなく、やや暇をもてあましていた私に、ニチメンの所長から「NIGCが、日本の石油会社の人々がテヘランに居るなら会いたいと言っている。NIGCに行っていただけませんか」と言われて、NIGC総裁を訪ねたのはテヘランに来て1ヶ月ぐらい過ぎた頃であった。そこで、このプロジェクトをNIGCと共同でやらないかと持ちかけられたのであった。

本社に話をつなぐと、本社とニチメンが早速に現地調査団を送り込んできた。私もこれに加わり、NIGCの専用機でテヘランからラバン島に飛び、島内施設をくまなく見学した。調査団が収集したデータに基づきFSを行った結果、このプロジェクトは4年足らずで投下資本を回収できる利益性の高いものと分かり、丸善石油とニチメンとがNIGCとの合弁事業への参加を決めた。すでに会社の組織、出向者も決め、あとはNIGCとの最終の詰めだけ、そんな矢先のプロジェクトの頓挫であった。

NIGCに「どういうことか」と詰問しても、「NIOCが中止して欲しいと言っている」の一点ばり。NIGCはNIOCの子会社、ガスはNIOCが管轄していたので、当初から「NIOC側は大丈夫なのか」とNIGCに念を押してスタートしたプロジェクトである。いまさらどういう問題があるのかと合点が行かぬまま、このプロジェクトは最終的に立ち消えとなってしまった。

8年後の1981年4月、私はこのプロジェクトを担当したNIGCのイザディ博士と、桜が満開の上野公園を歩いていた。その年の2年前にアブダビでの勤務を終えて東京本社に戻っていた私は、その年の3月に京都で開催された世界ガス・エネルギーシンポジウムにイザディ博士が参加していることを知り、会議終了後に東京で再会することにしたのだった。

この時に、博士から「実は、あのラバン島のプロジェクトは石油メジャーの横やりで潰されてしまったのだ。石油会社側からNIOCに『あの島には日本人を上陸させるな』と横やりが入り、NIOC内部では賛否両論があったが、結局押し切られてしまった」と聞

いたのであった。そんな干渉があったことをこの時私は知った。

石油メジャーの力は、経済面だけではなく国際政治の面でも政府を動かすほど強大であった。1951年にイランで石油の国有化に成功したモサデク首相がCIAの裏工作によって失脚に追い込まれた時にも、1962年にイタリアの国営炭化水素公社（ENI）エンリコ・マッテイ総裁が飛行機事故によって不慮の死を遂げた事件の裏側にも、メジャーの影が見え隠れしたともいう。

私のようなチンピラ社員にはまったく縁のない話とと思っていたが、このプロジェクトで石油メジャーの影の一端を見たようにも思えた。

1-5. イスファハンとペルセポリス

テヘランに滞在中、私は2泊3日の予定で、イランの古都イスファハンとペルセポリスを訪れた。

イスファハンは、1598年にサファヴィー朝第5代目のシャー・アッバス一世（在位1588-1629年）によって都と定められ、その王朝が絶頂期を極めた当時「イスファハンは世界の半分」とまで呼ばれた。絢爛たる文化の中心地となり、そこに建設されたモスクの豪華さはイスラム教を信仰するペルシャの象徴となったところである。

サファヴィー朝の始祖はシャー・イスマイル（在位1501-1524年）。イラン西部の古都タブリーズで即位し、シーア派の中の十二イマーム派の信仰がイランの国教と定められたのは、その時であった。

イスファハンはテヘランから南へ約340キロ、イラン高原中央部の標高1500メートル超のところにある。滞在したホテルはシャー・アッバス。「これがホテル？王宮ではないか」と見まごうばかりのモザイク細工と高い天蓋。重厚な感じがする建物、中庭も素晴らしかった。

翌日は市内見物。最初に、マスジェデ・イマーム（王のモスク）。両側にミナレ（尖塔）が立つ入口は高さ27メートル。壁面いっぱいにはイスラム特有のモザイク、その周りをシャー・アッバス1世の栄光を讃えた装飾のアラビア文字に絶句。

その前には、幅160メートル、長さ500メートルにも及ぶ矩形のメイダン。有名なメイダーネ・シャー（王の広場）。周りにはプラタナスの並木。中央部には緑の芝生と手入れの行き届いた木々と花々。噴水が勢いよくはじけていた。

王のモスクから北に向かって王の広場を突き切ると、長さ2.5キロメートルにも及ぶ有名なイスファハンのバザール。宝石店、絨毯屋、その他土産物屋などが建ち並ぶ。私はここで、快楽的なエロチシズムが漂う男女相愛の図が描かれたイラン独特の象牙板と妻に大きなトルコ石を買った。

絨毯屋で、親父に連れて行かれたのは店の裏手。工房らしきところに入ると、そこでは数人の女の子が一行になって座り、絨毯を織っていた。「1日織っても、織り進むのは数センチ。これを織り終えるには1年半はかかるよ」と言われてびっくり。「そんなに手がかかるのか、値段が高い筈だ」と納得した。

イスファハンのメイン・ストリートのチャハル・バグル大通りから遠目に見たザヤンデ川に架かる橋も印象に残った。日本に言えば、ここはさしずめイランの京都。

イスファハンからシラーズに移動。翌朝、私はタクシーでペルセポリスに向かった。

紀元前6世紀ごろ、イラクではアッシリアを滅ぼした新バビロニア王国、トルコではリュディア王国、イランではアリア人が作り上げたメディア王国と衰退したエジプト王国が近東を支配していたが、紀元前575年ごろメディアに従属していたアケメネス族が支配するペルシャの1小国アンシャンにキュロスという男の子が生まれる。

この男の子が後にメディアを滅ぼして全ペルシャを平定し、リュディアや新バビロニアも滅ぼし、ペルシャ帝国を作り上げたアケメネス王朝の大いなる王キュロス2世（在位前559ー前530年）である。その支配地域は東は東部イランから西は地中海、北はカフカスから南はペルシャ湾に及んだ。

紀元前530年に不慮の死を遂げたキュロス2世の後を継いだその子カンビュビスも、エジプトを征服したものの、謀反に遭って自殺をしてしまう。

その後帝国を再興したダリウス1世（在位前522ー前486年）の時代にアケメネス王朝はもっとも栄えた。大帝とその後の2代の王によって約87年（紀元前512ー425年ごろ）かけて、アケメネス王朝の最大の都として建設されたのがペルセポリスである。中東を代表する遺跡の3P、イランのペルセポリス、シリアのパルミナ、ヨルダンのペトラの1つである。

車を降りて道路から14メートルの高さの階段を上ると、正面入口である万国門。左右に雄牛の像、ただ右のものは頭部が欠けてしまっていた。この門には落書きがたくさん刻まれている。欧米人のものがほとんどだ。日本語のものは探り当てられなかった。

日本人がここを初めて訪れたのは、明治13（1880）年8月13日のことである。近代化を進めようとする明治新政府が抱えていた外交上の最大の問題は領土の画定と不平等条約の改定であり、当時わが国と同じく不平等条約で苦しんでいたペルシャとトルコの国情・商況調査のために、外務卿井上馨は「吉田正春（せいしゅん）使節団」を両国に派遣した。

使節団に加わったのは、土佐勤労党に暗殺された土佐藩参政吉田東洋の長男で団長の外務省御用掛吉田正春、陸軍工兵大尉古川宣誉、大倉組商社副社長横山孫一と同社社員、七宝焼磁器、小間物、金銀細工者商人の7人。一行はブシェールからシラーズ、ペルセポリス、イスファハンを経てテヘラン、ラシュトへ行き、そこからカスピ海を渡りバクー経由でトルコに行った。テヘランではペルシャ国王ナーセロッディーン・シャーに謁見した。その途次にペルセポリスに立ち寄ったのである。

門を上った広場を通り抜けると謁見の間への階段。施された数々の彫刻は歴史の教科書にも出てくる、貢物を捧げている人々や、牛に噛み付いているライオンなどの彫刻がびっしり。私は、その実物を目の当たりにした。

謁見の間の後ろに宮殿跡。左手の道を登ると、高さ20メートルほどの円柱がそびえ立っている。イランの青い空によく映える。かつて百柱の間といわれた大広間を支えた柱の名残りだ。

さらに奥には、王朝の財宝が保管されていたという宝庫。その突き当たりは急坂の断崖だ。そこを駆け登り、ペルセポリスの黄褐色の遺跡とその先に広がる緑が点在するマルブー・イ・ダシュート平原を見渡した。はるか彼方はザグロス山脈か。往時この一帯はうっそうたる緑に覆われていたが、人が住むようになって家畜が緑を食いつくし、禿げ上がっ

た風景になったと聞いた。

ペルセポリスから西北に6キロほど行ったナクシェ・ロスタムには、岩山の中腹をくり抜いたダリウス1世と他3人の王の壮大な磨崖王墓があった。

栄華を極めたアケメネス朝はダリウス3世（在位前336－330年）が前331年のガウメラの戦いにマケドニアのアレキサンダー大王に敗れ、前330年に滅亡した。

その後を継いでイラン人による大帝国を樹立したのが、サーサーン朝の始祖アルダシール1世（在位226－241年）である。サーサーン朝はホスロー1世（在位531－579年）の時代に最盛期を迎え、その支配は、西はシリア、東はバクトリアに及んだ。7世紀の初めに東ローマ帝国と攻防を繰り返している間にイスラム勢力が興隆し、これに敗れたサーサーン朝は651年に滅亡した。

私は、イランの壮大な古代の歴史に思いを馳せながら、ペルセポリスを後にした。

（8月号に続く）

経歴

1933年 新潟県生まれ

57年 東京外国語大学卒業。丸善石油（現コスモ石油）に入社。ベールート、アブダビに駐在。

92年 JICA専門家としてオマーン商工省顧問を務める。

96年 エクセター大学湾岸研究所名誉研究員として英国に滞在。

97年 98年までJICA専門家として再びオマーン商工省顧問を務める。

2007年 オマーンから、「勲一等カブース国王陛下文化・科学・芸術勲章」を日本人として初めて受賞。

10年 日本オマーンクラブ設立に加わる。事務局長に就任。

13年 同会長に就任。

18年 同名誉会長に就任。

著作物

「オマーンが見えてくる」（サイマル出版会、1995年）

「アラビア半島とどう付き合うか」（第三書館、2001年）

「オマーン見聞録」（展望社、2009年）

「玉座の改革者—スルタン・カブース」（訳書、朝日新聞社出版、2010年）

「Oman and Japan」（「オマーン見聞録」の英語版）（マスカット・プリンティング・プレス、2012年）

「Oman&Japan」アラビア語版（マスカット・サケラット社 2018年）